

聖書：創世 43：1～34

説教題：私と昼食をともに

日時：2024年6月16日（朝拝）

私たちはこの創世記で神の契約がアブラハムからその息子イサクに、イサクからその息子ヤコブに、ヤコブからその12人の息子たちに受け継がれて行くところを読んでいます。このヤコブの12人の息子たちにおいてイスラエル12部族の基礎ができます。しかしこの家は決して理想的な家ではありませんでした。むしろ問題がたくさんある家でした。特にヤコブが愛した11番目の子ヨセフを10人の兄たちが憎み、奴隷としてエジプトへ行く商人たちに売り飛ばしました。果たしてヤコブの家はどうなるのでしょうか。しかし神はこの契約を担う家を捨てられません。なお彼らを導いてこの世界に対する神の約束が継続して行くようにされます。摂理の御手をもって彼らの悪からさえも善を取り出すみわざを行って行かれます。

ヨセフは奴隷から何とエジプトの国政を司る宰相の立場にまで上げられました。王が見た夢を解き明かし、7年間の大飢饉に先立つ7年間の大豊作の内に穀物をたくさん蓄えました。やがて飢饉が始まり、全世界の人々がエジプトのヨセフのもとに来ます。その中にヨセフの兄たちも混じっていました。ヨセフはすぐ兄たちだと分かりましたが、兄たちはまさかエジプトの大臣がヨセフだとは分かりません。ヨセフは自分を明かす前に兄たちはどう変わったのか、20年前に自分を奴隷として売り飛ばしたことをどう考えているのか知ろうとします。そのためにエジプトに兄弟の一人を人質として残し、他の者たちに下の弟ベニヤミンを連れて来いと命じました。

しかし家に帰った兄たちに父ヤコブはベニヤミンを行かせないと言います。後でも触れますが、ヨセフがいない今、ヤコブにとってはベニヤミンだけが重要な息子でした。そのために動きは止まり、しばらくの月日が経過しました。そんな中、今日の43章1節は「さて、その地の飢饉は激しかった」と始まります。食料は底をつき、もう一度エジプトに行かなければならない状況になります。ここにももちろん神の摂理があるわけです。そこでヤコブとその息子たちはどうしたのかがこの43章の内容となります。特に記されているのが四男ユダ、父ヤコブ、そしてエジプトにおけるヨセフの姿です。この3人に注目して以下の内容を見て行きたいと思います。そしてより大きな視点で言えば、神が摂理の御手をもってこれらの人々に働きかけ、悪から善を取り

出す奇しいみわざを行って行かれるということになります。

まず注目するのはヤコブの4番目の息子ユダです。父ヤコブは穀物がなくなった時、「また行って、われわれのために食糧を少し買って来てくれ」と言います。するとユダが3節からこう答えます。「あの方は私たちを厳しく戒めて、『おまえたちの弟と一緒にでなければ、私の顔を見てはならない』と言いました。」ですからもし弟と一緒に行かせてくださるなら、私たちは行きます。しかし行かせてくださらないなら、私たちは行きませんと。父ヤコブは「なぜおまえたちは自分たちにもう一人の弟がいると言ったのか」と責めますが、息子たちは「あの方が私たちや家族のことについて、『おまえたちの父はまだ生きているのか。おまえたちには弟がいるのか』としきりに尋ねるので、問われるままに言ってしまったのです。『おまえたちの弟を連れて来い』と言われるとは、どうして私たちに分かったのでしょうか」と答えます。そしてユダが前に出て来て言います。8節:「あの子を私と一緒に行かせてください。私たちは行きます。そうすれば私たちは、お父さんも私たちの子どもたちも、生き延びて、死なずにすむでしょう。」 注目すべきは9節の言葉です。彼はここで「私自身があの子の保証人となります」と言います。「私が責任を負います。もしも弟を連れ帰らなければ、私は一生あなたの前に罪ある者となります」と。具体的にどのように保証するかは述べられていませんが、次の章から分かる通り、ユダはこのために自分の命さえも差し出す覚悟を持っていたようです。結果的に父はこのユダの言葉に動かされてベニヤミンのエジプト行きを許可します。ちなみに前の章最後で長男ルベンが説得を試みた時はダメでした。ルベンはもしベニヤミンを連れ帰らなかったら私の二人の子を殺しても良いと言いました。それに対してユダは自分自身の命をかけました。しばらく時間が経過したことも要素としてあったかもしれませんが、ヤコブはルベンではなく、ユダの言葉に動かされることになります。そしてこのユダが12人の息子たちの中でリーダー的役割を担う者となって行くのです。

ここに示されているのは以前からは変わったユダです。実はヨセフを奴隷として売ろうと提案したのは他ならぬこのユダでした。彼も父がヨセフだけを愛していることを快く思わず、ヨセフを憎んでいた兄たちの中の一人でした。ヨセフを殺すことだけは避けようとはしましたが、自分たちの手を汚さずに彼を消すにはエジプトへ行く商人たちに売り飛ばすのが得策だと述べたのはこのユダでした。その彼が、ここでは父が愛するもう一人の子を守るために自分の命さえも差し出そうとしています。ここに以

前とは大きく変わった彼の姿があります。

そのきっかけとなったのは前に見た 38 章の出来事でしょう。今日はその内容は振り返りませんが、ユダはそこで自分の罪を深く自覚する者となりました。そして前回 42 章 21 節で、ヨセフの兄たちはエジプトで苦しみを受けた時、自分たちがかつてヨセフを苦しめたことを思い出して、こう言いました。「われわれは弟のことで罰を受けているのだ。あれが、あわれみを求めたとき、その心の苦しみを見ながら、聞き入れなかった。それで、われわれはこんな苦しみにあっているのだ。」 ユダはこのような兄弟たちの中でも自らの罪を深く自覚した者として、かつてと同じ道を行かないという歩みへ転換したのです。また今や父に対する憐れみの心を持つ者として、ベニヤミンをあなたのもとに連れ戻すまで責任を持って行動しますと約束したのです。この彼の言葉にヤコブは動かされます。このユダがどれほど真摯な心でこう述べたかは次の章でより明らかに示されることになります。そしてこのユダの系譜を通してこそ将来救い主キリストは生まれ出ることになるのです。

次に見るのはイスラエルすなわち父ヤコブです。彼はユダの言葉を受けて、「それらこうしなさい」と、11～12 節のように言います。「この地の名産を袋に入れ、それを贈り物として、その方のところへ下って行きなさい。乳香と蜜を少々、樹膠と没薬、ピスタチオとアーモンド、また二倍の銀を持って行きなさい。」 そして 13 節で「弟を連れて、さあ、その方のところへ出かけて行きなさい」と言います。ヤコブもついに観念したようです。しかしただ諦めたのではなく、14 節で祈りをもって送り出します。「全能の神が」と彼は始めますが、これはパダン・アラムへの逃亡の旅に出発した時、父イサクが 28 章 3 節で祈ってくれた時の言葉でもありました。ヤコブはこの窮地に追い込まれた中、改めて「全能の神」に目を上げて頼ったのです。全能の神が「おまえたちをあわれんでくださるように。そして、もう一人の兄弟とベニヤミンをおまえたちに渡してくださるように。私も、息子を失うときには失うのだ」と。

ヤコブはここでベニヤミンをつかんで離さなかった手を緩めて神の手に委ねました。これまでベニヤミンはヤコブにとって偶像のような位置を占めていたと言えるかもしれません。なぜ彼はそんなにもベニヤミンを大事にしたのでしょうか。それは何と言っても愛する妻ラケルから生まれた二人の子どもの内の一人だからです。ヨセフがいなくなった今、残るはベニヤミンのみです。しかしある人たちはもっと深い意味

がそこにあると見ます。それは創世記 3 章 15 節からつながる救い主の約束を受け継ぐのは彼だとヤコブは考えていたということです。ヤコブは救い主の約束は当然愛する妻ラケルから出る者に受け継がれると考えた。それで最初の子ヨセフをあれほど大事にした。しかしヨセフがいない今、もうベニヤミンしかいません。その思いが彼の深いところにあってベニヤミンを自分の側に置いたのだらうということです。しかしヤコブはこうして自分の手の中にながらついでいたものを離すように、そして神の手に委ねるようにと導かれたのです。私たちも「これだけは」と思って自分の手の中にながらついでいたものがあるかもしれません。あるいは、そのように握りしめて離さない自分の思いがあるかもしれません。それが私たちにとっての偶像になっているということはないでしょうか。結果から分かることは救い主が誕生するのはベニヤミンからではなく、ユダからであったということです。ここに人間の思いとは異なる神のご計画が示されています。私たちにとっても驚きかもしれませんが、キリストはラケルからではなく、愛されなかった妻レアの子から生まれ出るので。その約束を担う者として、言うならば頭角を現して来たのが先に見たユダでした。ヤコブは神にお委ねすることによって、神が良しとされる最善の導きと祝福を受ける者となって行きます。また彼は「もう一人の兄弟とベニヤミンをおまえたちに渡して下さるように」と祈りましたが、ここでの「もう一人の兄弟」とはエジプトにいるシメオンのことです。しかし彼は全能の神に委ねて送り出した結果、この二人だけではなく、ヨセフをも取り戻すこととなります。自分の思いにこだわるのではなく、自分の手を緩めて神にお任せし、神の憐れみを祈り求めることによって、ヤコブは自分の思いを遥かに超える導きと祝福を受ける者とされて行ったのです。

こうしてヤコブの息子たちはエジプトへと出発しました。今日、三つ目に見るのはこの兄弟たちを迎えたヨセフについてです。彼は兄たちが再びエジプトに来る日を今か今かと待っていたことでしょう。そのために主の導きを日々祈っていたことでしょう。なかなか思ったようにその日は来ませんでした。ついにその時が来ます。今度は弟ベニヤミンを連れてです。ヨセフはそれを見るや、「この人たちを家に連れて行きなさい。この人たちは私と昼食をともにする」と家を管理する者に言います。食事へと招かれたのはベニヤミンだけではありませんでした。その他の兄たちも一緒でした。兄たちによってこれまで苦しい地獄のような生活を強いられて来たヨセフでしたが、主の導きの下、彼らとの和解を願い、模索するヨセフの姿があります。

一方の兄たちは恐れます。前回はあれほど荒々しく接したエジプトの大臣が今回はなぜこんなに親切なのか。これは罠ではないのか。思い出されるのは前回の銀のことです。そのことで自分たちは問い詰められ、奴隷にされるのではないか。そこで彼らは家の管理者に自分たちから前回の銀のことを申し出ます。すると彼は 23 節でまず「安心なさい」と言います。この言葉は実は原文ではシャロームという言葉になっています。すなわち平和とか平安という意味の言葉です。そして実にこの言葉はこの後 3 回、合計 4 回もここに続けて出て来ます。家族の平和が失われ、壊れて、ビクビクしている彼らに、シャローム！シャローム！シャローム！シャローム！と 4 回もこの言葉が繰り返して使われています。

この管理人は「あなたがたの銀は私が受け取りました」と言います。これは前回私が確かにあなたがたから穀物の代金を受け取りましたよという意味でしょう。ですからあなたがたの袋にあったものは、あなたがたの父の神があなたがたのために袋の中に入れてくださったものでしょうと言います。エジプト人のしもべがこのような表現をするとは考えられないようなことです。つまりこれはヨセフがこのように言うようにと前もって彼に伝えていたということなのではないでしょうか。ここにもヨセフの兄たちに対する思いやりと愛が示されていると言えます。その彼らをさらに安心させるかのようにシメオンが連れて来られました。またヨセフの家で彼らは水を与えられ、足を洗い、ロバの餌も与えられました。

そしてついにヨセフが家に帰って来ます。27 節の「安否を尋ねた」という部分の「安否」という言葉もヘブル語ではシャロームです。平和であるか、平和があるようにという意味です。また「父親は元気か」という部分の「元気」と訳されている言葉もシャロームです。神の平和、神の祝福の状態にあるかということです。28 節の彼らの答えの中の「元気」もシャロームです。こうしてシャロームが失われている家族に、シャローム、シャロームという言葉が連発されていることに目が留まります。そしてついにヨセフは同じ母の子、弟のベニヤミンを見ます。ヨセフが奴隷として売られた時、ベニヤミンはずっと小さかったと思われれます。ヨセフは胸が熱くなり、急いで奥の部屋に入り、泣きました。繰り返し陰で泣くヨセフの姿に彼の心の思いが示されています。

そして一同は食事をともにしました。エジプト人のしきたりのため、食事は別々に

出されました。彼らの席は指定されていて年長者からの順になっていました。兄たちは驚き合いましたが、それはヨセフが指示したことでした。最後の 34 節にヨセフの食卓から彼らの分が与えられたとあります。兄たちもこの特別な光栄と祝福にあずかりました。ベニヤミンには 5 倍も与えられました。これは弟に対するヨセフの特別な思いの現れだったのでしょうか。ある人たちはこれも兄たちを試すための方法だったのではないかと見ます。いずれであれ、そのことはここで問題になりませんでした。この 43 章は最後に「彼らはヨセフとともに酒を飲み、酔い心地になった」という言葉で締め括られます。これは彼らがヨセフと食事をして十分に楽しんだ、心から満足したということを言っているのでしょうか。ヨセフと兄弟たちがこのように楽しい食事の交わりの時を過ごしたのです。これは完全な和解の前味となるものでした。その一歩手前のところまで来た！というのが今日の 43 章です。ヨセフはこの後、最後にもう一つの確認をします。それをもってついに真の和解へと至ることになります。

さて私たちの様々な人との関係はどうでしょうか。平和が失われている状態にあるのでしょうか。その関係は壊れているのでしょうか。私たちの家族の関係はどうでしょうか。神の家族である兄弟姉妹との関係はどうでしょうか。様々な人間関係はどうでしょうか。創世記のこの部分は、神は長い間、絶望的に壊れた関係にある者たちの間にも平和をもたらすことができるということを記しています。神は奇しい摂理の御手をもって、そのように導くことができると。確かにこれはすべての人に例外なく当てはまることではないかもしれませんが。今、私たちが見ているのは神の契約を担う人たちの話です。神はご自身の約束を投げ捨てず、この家族に平和を与え、救い主を与えるみわざを進めて行かれます。そしてその救い主を通して全世界の人々をご自身の祝福に招き入れようとしておられます。とするなら、その救い主を信じる私たちの間にもこの神の平和の祝福、和解の祝福は広がって行くべきではないでしょうか。特に神の家族である者たちの間では間違いなくそれはできるはずですし、それを目指して行くべきではないでしょうか。またそうでない人たちとの間にも、神の導きによって、この祝福が広がって行くことを求めて行くべきではないでしょうか。私たちの地上の人生はまだ書き終えられていません。理想から程遠い状態から神が奇しい御手によってどのように導いてくださるか、私たちは自分勝手に諦めてはなりません。摂理の主に信頼して、自らもこの恵みの道を踏み行く者とさせていただくことを祈り求めるべきでしょう。

私たちも今日の御言葉で学んだことを自らの歩みへの導きとしたいと思います。ユダのように、自分の罪を悔い改めて変えられた者となることを求めたいと思います。変えられた彼がこの後、大きく用いられ、救い主の誕生へとつながって行きます。またヤコブのように自分が握っているものが偶像になっていないか、その手を緩めて、そのことも神にお委ねすべきでないかどうか考えたいと思います。自分の思いに固執せず、神の憐れみを祈ったヤコブが祝福されて行きます。またヨセフのように自分に害を及ぼした人にも愛と寛容と憐れみをもって接する者とされたいと思います。神は素晴らしい御手をもって私たちの思いを超えた祝福を導いてくださるお方です。その摂理の御手を信じて私たちの取るべき行動を祈りの内に取り、神のシャローム（平和）が私たちのあらゆる関係に与えられ、そのことを通して主を賛美し、主に栄光をお返しする。そのような歩みへ進む者とさせていただきたいと思います。